

メープルレター（８８）

もう秋、そして闘病

もう秋の気配です。猛暑の後、激しい雨が２－３日間降り、温度が下がり、すっかり秋模様になりました。これからは、暑い日と寒い日が交互に続いて紅葉の時期になります。

８月は義理の次男の長男（１５歳）を５日間ほど預かっている間に、あっという間に終わってしまいました。親友の結婚式の祭司役をすることになっていた次男は、３日間結婚式に携わり不在のため、その前後を含め５日間預かることになっていました。次男の親友はカナダの資産家の息子で、生まれた時からお金が落ちてくるため、まともに働いたことはなく、結婚相手は稼ぎの良い精神科医で、更にお金が入ってきます。奥さんの仕事の疲れがとれるよう優しく言葉をかけて慰め、美味しい料理を作ってあげていれば良いという、男にとっては（いや、女にとっても）夢のような運命を持った子なのです。運命の悲劇は、母親が夫の不倫を苦にして自殺してしまい、その姿を見て以来精神不安定になったことでした。その割には女の尻だけは良く追いかけるのですが。精神科医の奥さんなので、この点バランスが取れているようです。

この結婚式には義理の長男や新郎の従兄など学校（中高一貫の有名男子校）時代の友人たちが何人か出席しました。結局、同窓会のようなものです。カナダやケベックの政治界、経済界のトップはこの学校出身が占めているとも言えます。湖に面した高台に建つシャレーでの内輪の結婚式と言っていましたが、それでも１００人ほど集まったようです。

さて、預かった孫は何とも良い子なのです。金髪碧眼、目に嬉しいイケメンです。親の躰が厳しく、叱られないよう怯えてようなところがあり、ドリトル先生は孫に

「リラックスしていいよ、ここでは。好きなようにして。テレビも見たいだけ見ていいから。」

「でも、何でもするから、言って。」

孫は、ただ、おどおどし、小さくなっています。あーこの子は小さい時からこうだった、大人が怖いのです。

「何もしなくていいから。日曜日はおばさん（マダム田中とドリトル先生の娘）があちこち連れて行ってきて、夜は皆でここでパーティだから。おじいちゃんの誕生祝いをしようね。ケーキはもう注文しておいたから。」

こまめに気を使う子で、お皿をかたづけ、荷物を持ち、ウサギのようにきょろきょろとマダム田中の動きに気を配っては、ついて回っていました。そんな孫に次男から、ひっきりなしに、電話がはいました。日に3回。嫁から2回。合計5回。6回目は孫から電話をすることになっていたようです。

「電話に出ない、どうしよう。」

おびえて家の中じゅう走り回って電話をしていました。

「ほおっておきなさい。今頃飲んだくれて友達と喋りまくっているんだから。」

「でも、約束したから。」

「構わなくていいわよ。それより、面白い番組でも見よう。」

すっかり老いが激しくなってきたドリトル先生は、この機会にと、必死で孫に昔話をするのでありますが、孫は黙って聞いているばかりでした。

「なんてオピニオンのない奴だ。反応がない。」

ドリトル先生の話は愚痴が多く、15歳の子供には世代差もあり、飲み込めるわけがありません。

娘とはイメージセンター（スリーダーのデザインイメージの展示場）に行ったり、アエリアンの新しい映画をみたり楽しい時を過ごしたようです。夜は、娘一家とビュッフェでパーティです。マダム田中は頑張って20種類ほどの料理を作りました。行きつけの日本人のケーキ屋さんに頼み、マロンクリームをベースにしたドリトル先生のバースデーケーキも注文しておきました。自分で、ケーキ作りをする、料理上手の孫も美味しく食べていました。

「ねえ、ママ、それにしてもルカ（孫の名前）にロイック（次男）から3回の電話、母親から2回も電話がかかってきたのよ。5回の電話よ。信じられない。うるさいねえ。」

「我が家も毎日3回の父親の電話、2回の母親の電話だった。誇り高い大学教授もプライベートはうるさいおっさんなのかも。」

翌日は飲茶で全員が集まり、孫の我が家でのバカンスは終わりました。あー疲れた。

9月になり、マダム田中の新しい生き方が始まることになりました。ひと夏、検査を続けて来た乳がんが、専門医とのアポで確認されました。時おり襲う激しい疲れと乳腺の張りとしこりが気になっていました。血液検査等の健康診断は完璧な結果なのですが、ホームドクターにみてもらうことにしたのが6月の始めのことです。

「お久しぶり。お元気そうですね。素晴らしい健康状態ですね。年齢とは思えません。」

マダム田中の健康診断の報告書をみながらこうにこやかに話かけるホームドクター。

「でもちょっと。」

ここでホームドクターの携帯に電話が入り。

「ちょっと待って。僕のガールフレンドから。」

78歳のホームドクターのガールフレンド？嬉しそうに話しこむこと約5分。

「すみません。失礼しました。43年間連れ添った妻と別れて、巡り会った20歳年下のパートナーなんです。こんなことってあるんですね。」

微笑み一杯のドクターの笑顔。気のせいかわ返ったようにも見えます。それにしても、いったい、マダム田中の診療はどうなっているのでしょうか。

「ドクター、実は、この胸のしこりが気になってやってきたのです。」

「どれどれ、確かに小さくあるねえ。詳しく調べましょう。どんなものであっても、とってしまった方が良いでしょう。まずは、階下の放射線センターで予約を取って、マンモグラフィー（乳房専用のX線）をとってください。その結果を見てみましょう。」

マンモグラフィーをとって1週間後、

「今度はスリーデーのマンモグラフィーとエコグラフィーをとってください。」

と放射線センターから連絡があり、放射線医は、エコグラフィー検査の後、

「やっぱり、小さい腫瘍があるわねえ。良くて悪くても取り除いた方が良いでしょう。今度は細胞摘出診断を病院で受けてください。病院に連絡をしておきますので、あちらから予約の連絡がきます。」

細胞摘出検査を受けたのはその1週間後の事です。担当の放射線医はイケメンの若手でした。

「ちょっと痛いですが、大丈夫ですか。あれ、貴女は田中さんていうのですか？僕の仲の良い友達に田中ゆりちゃんていう子いるんだけど、貴女って日本人？あの子ブラジルに行っちゃったんだ。あ、そうそう、もう少し我慢して、ここもとりますよ。」

「痛い、めちゃめちゃ痛い。」

「麻酔を少し強くしますね。もう少しとりますよ。4か所とりましたから。結果はホームドクターに送っておきます。少し時間がかかりますが。」

その結果がホームドクターに送られたのはその1週間後の事でした。

「やはり悪性の癌のようです。大きな大学病院の癌病棟に書類を送っておきます。手術を受けることになると思います。その後の治療などを含めて担当の良い先生が早く見つかると思います。」

ケベックの医療事情は悪く、専門医を見つけるのは至難の技です。ホームドクターに度々連絡をとりながら病院の担当医を見つけ、アポがとれたのは9月の始めのことでした。専門医は多忙を極めていたようでした。診療室にはなかなか現れませんでした。インターンの先生がその合間に山ほどの質問をし、状態を確認していました。

「ステージ1の治療可能な状況の癌です。他に持病などはありませんか。」

「健康状態はこの報告書のように、完璧なのです。」

「そこのベッドに横になってください。少し状態を見てみましょうね。担当の専門医はとても優秀な先生ですから、安心されてください。彼が手術を担当します。」

乳房の検診後、専門医と連絡を取り、何度か催促をしているようでした。暇なのか、

「そうそう、この間1月間ほど日本に夫と行ってきたんですよ。座禅組んだり、素晴らしい旅でした。」

日本はどこに行っても実に人気があるようです。それより、私の診療はどうなっているのでしょうか。やっと担当の専門医がやってきました。

「ステージ1. 治療可能ですが、手術は必須です。全摘手術にしますか部分摘出にしますか。」

乳房の検診は触るだけで完璧にわかるらしく、イメージ画像や資料にも目をざっと通すと

「手術、放射線治療、ホルモン療法は必須です。手術は1時間から1時間半ほどかかるでしょう。化学療法は手術時に細胞を少し摘出して、分析してから考えます。手術についての詳細は担当看護婦がご説明します。朝入院して夕方退院になります。」

担当看護婦にあって説明をうけ、手術は約8週間後ということになりました。これで良いのか疑問は残りますが、かなり遅くなるようです。

「まだ時間があります。それまで何も変えずに今まで通り普通に暮らしてください。」

無理はしない方が良くと思い、いけばな活動も、お稽古も、半年間入っていた予定もキャンセルして手術前後の体調の管理をすることにしました。この専門医との面会は娘が付き添ってくれ、メモをとるなど助けてくれました。それにしても、義理の息子二人が毎日5-6回電話をかけてきてうるさかったのです。

「大丈夫？」

「大丈夫だけど大丈夫じゃないわ。」

「何か助けることない。迎えに行って病院まで連れて行ったり何でもするから。」

優しいのです、二人とも。ただ、うるさいだけ。

「ありがとう。でも、病院は歩いて15分の所だし、健康の為にも行きも帰りも歩いたから。」

「歩いたー！！そんな。パパは？」

「本当に大丈夫なのよ。」

「でもー？」

「一つだけある。イケメンとバーでお酒でも飲みたいから、連れて行ってくれる？」

「えー?! バー、お酒？」

「そう、今はその程度でいいのよ。心理的なサポートよ。気分転換になるから。」

手術前後、長い道が待っているようです。